

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01650

研究課題名(和文) ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから

研究課題名(英文) Inquiring about Karada(as whole self)as cultivated in Dance Education ~ Relation to Somatics and Body Work.

研究代表者

原田 奈名子 (Harada, Nanako)

京都女子大学・地域連携研究センター・客員研究員

研究者番号：70181021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ソマティクスとボディ・ワークの概念がさまざまなボディ・ワークを体験し研究討議する中で一層明瞭になった。ボディ・ワークによってからだの機能向上を図ることができる。ソマティクスはワークではなく、からだに向かう態度やからだの捉え方を基盤とする研究領域名である。教育実践や研究討議を経て我々が導き出した結論は、以下のようにまとめられる。ソマティクスは一人称のからだを基盤に置きつつ外界に対しても開いている。それゆえ、そのからだはダンスし、ダンスがからだを育てることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義の第一義は、舞踊教育に携わる教育研究者に我々の課題意識を共有できたこと、第二にスポーツ教育に携わる教育研究者に問題の共有を図るべく課題提起ができたことがあげられる。ダンスが「良き市民を育てる最も適した領域(Deborah)」と言われるのは、ダンスが自他の気づきを拓き、深め、全体性あるからだの共感、共振を必須とするからである。そういうからだゆえにダンスができ、ダンスがからだを育てる。この視点がスポーツ教育者にも受け止められた。

研究成果の概要(英文)：The concept of somatics and bodywork became clearer through the experience and research of various bodywork. Bodywork can improve the functioning of the body. Somatics is not a work, but a name of a research area based on the attitude toward the body and how to perceive the body. The conclusions we have drawn through educational practice and research discussions are summarized as follows. Somatics is based on the first-person body and is open to the outside world. Therefore, the body can dance, and dancing can nurture the body.

研究分野：舞踊教育

キーワード：ソマティクス ダンス教育 ボディ・ワーク からだ観 一人称の語り

1. 研究開始当初の背景

(1) <学校教育における表現運動・ダンス領域の実態と本研究における課題>

第二次世界大戦後、学校におけるダンス教育は、指導者による既成作品の指導から学習者の自由で創造的な表現活動の支援へと大転換を遂げた(水谷,1975)。だが、現職教員を対象とした調査では、その指導・支援の難しさが繰り返し指摘されてきている(安藤他,2003・寺山 2007・畑野他,2010・松本奈他 2013・茅野理子 2013・山崎 2013)。これらの先行研究において共通して考察された難しさの要因として「学習内容が不明瞭であること」が挙げられる。

本研究代表者原田は、この領域の段階的な学習についての論説の中で、「動きを見つける工夫の仕方と、見つけた動きや感じそのものが学習の内容である」ことを主張してきた(原田 2006)。この主張にある「動き」には頭で考えた「動き」もある一方で、からだが自然と見つけた「動き」もある。また、研究分担者大橋は、学習指導要領解説やダンス教育の先行研究を取り上げ、テーマや題材からイメージして動くという学習過程に前提があることを指摘してきた。ダンスの学習においては、頭で考えた動きをからだでやってみるという営みもさることながら、「からだ」が動くことが学びの中心にある」という現在進行形の営みこそが重要であろう。**本研究では、現在進行形の営みにおける「からだの学び」について検討することが課題となる。**

(2) <着想に至った経緯>

従来のダンス教育では、学習内容が不明瞭であったとあっていいだろう。また、中央教育審議会(2008)の体育の改善の基本方針「集団的活動や身体表現などを通してコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通して論理的な思考を育むことにも資する」を受け、話し合い活動によって思考力・判断力・表現力を育てようとする協同学習の試みもみられる。だが、ダンス教育の中では、ともに動く中で「協働」できるからだを育てることに重点を置くことが求められる。特に「からだで協働する活動」の中で、一人称の「からだ」がどのような経験を得るのが問われるであろう。

本研究ではこのような問題意識から、一人称の経験としての「からだの学び」に着目し、「何に気づき感じることができたのか」「どのように動くことができたのか」を考察することによって、ダンス教育で育てる「からだ」について検討していくことが重要であると考え、研究テーマを設定した。

(3) <ソマトイクスとボディ・ワークのかかわり>

「ソマトイクス」はT. Hanna(1928-1990)がその著書「Bodies in Revolt(1970)」の中で初めて「ソーマ」という用語を用い、研究機関誌「ソマトイクス(Somatics; Magazine-Journal of the Mind/Body Arts and Sciences,1976)」を発行したことにはじまるとされる。一方で、ソマトイクスという名称を提唱したのは Hanna であるが、ソーマやソマトイクスに関する用語は誰もがそれを同じように使っているわけではないし、ソマトイクスという領域を一つの実在物として言及すること自体も危険であるとの指摘もある。ボディ・ワークを「ソマトイクス」という思想の具体的な実践技法として捉え、それらの実践技法における「からだの学び」について考察を進めることにする。先に「からだの学び」という用語を使用した。本研究の考察では、「からだ」は一人称の知覚で内側から知覚された身体を意味し、三人称の知覚を通して分析され明らかにされてきた「身体」とは異なる現象として「学び」を捉えようとする。

(4) 本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

本研究のオリジナリティは、「ソマトイクス」という思想と「ボディ・ワーク」という具体的な実践技法のかかわりから、一人称の経験として「からだの学び」を明らかにしていくところに

ある。特に、これまでテーマや題材、イメージといった用語で語られ、頭での理解が先行する営みが多かった「ダンス教育」について、学習者の「からだ」が具体的にどのような経験をするのか、その経験を通して「何に気づき、どのように感じるのか」、学習の結果「どのようなことができるようになったのか」に着目することによって、協働して動く体験における「からだの学び」が明らかにできると考えている。

2. 研究の目的

戦後学校教育における表現運動・ダンス領域では、自由で創造的な表現活動を目指して、指導・支援が行われてきた。一方、現職教員からはこの領域の指導・支援は難しいといわれてきた。その難しさの要因は、テーマや題材、イメージが重視されたことによる「学習内容の不明瞭さ」にある。里見は1990年代にすでに「我が国の身体表現の教育には『表現するからだを育てる』という大切な教育の局面が抜け落ちている」ことを指摘している。本来、表現運動・ダンス領域の学習は、「からだの学び」として具体化されなければならないのではないのか。

本研究は、このような問題意識から、「**表現運動・ダンス領域でどのような『からだ』を育てようとするのか**」について、**ソマティクスの思想とボディ・ワークの技法をもとに問い直すことを目的とする。**

3. 研究の方法

(1)「ソマティクス」・「身体論」について文献考証を行い、その思想について理解を深める。ワークショップや学会においては、研究討議を重ね、「ソマティクス」という思想、「ボディ・ワーク」という技法、「ソマティクスとボディ・ワークのかかわり」等について、文献考証も含めて、考察を進める

(2)全期間を通してソマティクスの具体的な技法であるボディ・ワークの具体的な事例を体験共有する中で「からだの学び」について検討する。その際、ボディ・ワークのワークショップの内容を記録するとともに、「振り返りの討議」について質的分析を行う。授業実践の場で用いられている振り返りカード等の作成についても「一人称のからだの経験」についての記述内容を検討する。

4. 研究成果

(1)ソマティクスの思想とボディ・ワークの概念

文献購読と併せて講師を招いての研究会やワークショップ、シンポジウム等を開催してきた。研究期間を通しソマティクスという語の概念の多様性を確認した。

もともと身体(生体)を表すギリシア語である soma に、トーマス・ハナは一人称の知覚によって内側から感じられる身体として新たな意味づけを行い、人間を内側から知覚した時に体験される soma を探求するアプローチの総称としてソマティクスを創出した(1976年)。しかしハナの「What is Somatics? (1986)」で述べられた説明では今日のソマティクス領域の全体像を表しえない。福本は「米国教育界にみられるソマティクスをめぐる関心」の関連論文の購読・解説に加え、soma のとらえ方の論議をした。福本によれば、ソマティクスのキーワードである「aware 気づき」や「soma ソーマ」の捉え方が、立場や文化によって異なると確認された。橋本、劉、村川、畑山もこの点に言及した。

以下、「ソマティクスとは何か」をテーマにしたシンポジウム主導主催者である共同研究者村越の記録論文(2022)を借用してまとめとしたい。

村越は、2000年以降に注視されているソマティクスの特質として以下を取り上げている。

ジル・グリーンソーシャル・ソマティクス理論:グリーンは「よりマクロな社会政治的領域

に踏み込み、ソマティックな経験が、私たちがそれぞれ暮らす文化に影響を受けたものとして、いかに身体に刻み込まれているかを取り上げている人たちもいる。私はソマティックの理論と実践に関連する社会政治的な問題を扱っている文献を『ソーシャル・ソマティック理論』と呼ぶことにした (Green 2002)。」

原田もオンライン参加した ISMETA (International Somatic Movement Education and Therapy Association) ではこの領域に多量の発表があった。また、彼女は 2018 年舞踊学会の講演においても同様の指摘をしている。

グレナ・バトソンの精神性と文化的背景：バトソン (2009) は、「ソマティクス研究をする研究者の在り方に視点を当て、その研究方法の特殊性をただ批判するのではなく、肯定的な読解力として研究者の感受性を含みこむ姿勢を示した。」

東洋と西洋という概念から捉えたソマティクス：ソマティクスは西洋の産物として理解が広まっている。ムーラン (2014) が論文「Somatics: Investigating the common ground of western body-mind disciplines」の序章で明示しているほか、で紹介したジル・グリーンも、舞踊学会 (2018) において「ソマティクスは西洋の身体観に根ざしている」ことを述べた上で、自身のソーシャル・ソマティクス理論について発表している。村越は、今後の課題として、「日本のソマティクス」について、国内外の研究者らと議論する必要があるとまとめている。

村越直子 (2022)：ソマティクスとは何か， 武庫川女子大学生生活美学研究所紀要第 32 号, pp.109 - 118.

6 年間の講師陣に謝意を表し以下に示す (順不同・敬称略)：福本まあや (お茶の水女子大学)、吉田美和子 (上智大学)、劉 美珠 (台湾国立台東大学)、橋本有子 (お茶の水女子大学)、熊谷佳代 (岐阜大学)、村川治彦 (関西大学)、畑山知子 (南山大学)、Deborah Damast (ニューヨーク大学)。参加者は舞踊教育を専らとする大学教員、最後の Deborah の会には関西の高等学校教諭らの参加もいただいた。

(2) 「からだのまなび」、振り返りについて

概念については我々 3 人とも次第に明瞭になりながらも、実践の場に落としこむ具体的な方法を見いだせずに来たが、実践を踏まえ、まず「からだは何を体験したか」を問うことによって、ダンスにおけるからだを育むことができると考えるに至った。

2019 年に原田と大橋と研究協力頂いたもう 1 名の舞踊教育研究者が同じボディ・ワーク (BMC) を体験した。このボディ・ワークの振り返りについて、原田が、「自らが自らのからだをどう体験しているか」を明らかにしようと、「からだに起きたこと・からだを経験したこと」と「考えたこと」の記述をもとめ、論文にまとめた。するとこの方法が本テーマ「ダンス教育で育てるからだ」に接近できると示唆を得た。それを踏まえ、2020 年の夏に岐阜大学の熊谷にダンス指導を依頼して、原田と大橋、研究協力者 2 名が受講し、上述した観点で内省を記述した。その方法は、受講直後にスマートフォンに「からだに起きたこと・からだを経験したこと」を音声入力する、それから一定の期間を置いて「考えたこと」を記述するのである。4 名の振り返り内容は、文章量も含めて大きく異なった。その差は BMC のボディ・ワーク受講後の記述と同様、これまで自らの体験について「からだに起きたこと」という視点で振りかえってきたかという個人史が反映されていた。これについては研究資料を得たが論文にまとめるには至っていない。

そして、2021 年に原田と大橋が授業の中でこの振り返りを試行的に実践した。その結果について原田は、実践内容と「からだに起きたこと・からだを経験したこと」のフィードバックをまとめた。大学 1 年生の 90 分の表現とリズムダンスの両方についての記載内容は、受講学生によって文章量や内容にばらつきがあるものの、問いに戸惑うことなく回答していた。内容は「全員

が困ることなく、踊る体感を持つ、勝手にからだが振舞う、を味わい、表現運動の面白さや喜びに触れ得た」とまとめられた。

これまでの一般的な振りかえりの問いかけは、「できたことや困ったこと」に集約されよう。つまり、授業後に自己の振る舞いを第3人称の視点で分析して記述するように求めている。一方本研究は、「からだは何を体験したか」と問いかける。我々は実践を基に、まずそのように問うことによって、ダンスにおけるからだを育むことができると考えるに至った。

原田奈名子(2020)：一人称で語るBMC (Body-Mind Centering)体験ーダンス教育における「振り返り」を問う- , 大谷大学初等教育学会研究紀要第2号 : 102-117 .

原田奈名子(2021) : 「1、2、3 (1・2・3)」遊びを核にした表現運動 リズムダンスと表現」雑誌女子体育 2021年(秋号)

(3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

体育科教育学会にて(2021年6月)原田と大橋が発表した時、「提案者らは焦点を絞って発表したつもりだったが、多様な例を示したことが災いしてか、各参加者が各自の課題意識に引っかかったことについて発言された結果、教材、教材内容、日本の舞踊教育のバックグラウンド等に渡る議論となり、提案課題が共有されたとはいえなかった。」しかし、体育科教育学会で発表したからこそスポーツ領域の教育研究者にも投げかけることができた。これからも舞踊教育内に留まらず、「からだ」を問う教育の場に発していく意義を確認した。

研究最終年の2023年3月、Deborah Damast (ニューヨーク大学)を招いた研究会では舞踊領域の教育研究者に課題が共有された実感があった。これから各研究者がこの課題を問いながら日々の実践と研究を深めることが期待できよう。

原田奈名子・大橋奈希左(2022) : 第一人称のからだ観を育む可能性 - 表現運動・ダンス領域に焦点を当てて - , 体育科教育学会ラウンドテーブル報告

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 大橋奈希左	4. 巻 19
2. 論文標題 ダンス教育における「つくる」についての考察 つくる主体を問う	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 213-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村越直子	4. 巻 10
2. 論文標題 マーサ・エディのソマティック実践と思想：「社会性のある身体 / Socially Conscious Body」に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 臨床教育学研究	6. 最初と最後の頁 44-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村越直子	4. 巻 32
2. 論文標題 ソマティクスとは何か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 武庫川女子大学生生活美学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 109-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Eddy Martha著、村越直子、橋本有子共訳	4. 巻 14
2. 論文標題 ソマティック実践とダンスの小史:ソマティック・エデュケーションの歴史的展開とダンスとの関係」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Dance & Somatic Practice	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子・大橋奈希左	4. 巻 38
2. 論文標題 第一人称のからだ観を育む可能性ー表現運動・ダンス領域に焦点を当てー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育科教育研究	6. 最初と最後の頁 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11243/jsppe.38.1_45	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子・大橋奈希左	4. 巻 23
2. 論文標題 一人称のからだ観を育む討議課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 舞踊教育学研究	6. 最初と最後の頁 15 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34595/danceeducation.23.0_15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子	4. 巻 63
2. 論文標題 「1,2,3(1・2・3)」遊びを核にした表現運動:リズムダンスと表現(大学のダンス)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 女子体育	6. 最初と最後の頁 26 - 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村越直子、東出益代	4. 巻 30
2. 論文標題 Gaga:「生活する身体」と「パフォーマンスの身体」の往来を可能にするソマティック探求	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武庫川女子大学生生活美学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 249-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子	4. 巻 20
2. 論文標題 舞踊・ダンスにおける「からだ観」・「舞踊観」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 舞踊教育学研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子	4. 巻 2
2. 論文標題 一人称で語るBMC(Body-Mind Centering)体験 -ダンス教育における「振り返り」を問う-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大谷大学初等教育学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 102-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子	4. 巻 11
2. 論文標題 「体の動きを高める」に関わる体育科の教科内容の検討 実践を踏まえ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大谷大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 40-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大橋奈希左	4. 巻 11
2. 論文標題 「アート」の視座からダンス教育を問い直す	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 56-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子	4. 巻 20号
2. 論文標題 舞踊・ダンスにおける「からだ観」・「舞踊観」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 舞踊教育学研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田奈名子	4. 巻 68巻10号
2. 論文標題 身体技法の再評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 729-733
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村越直子	4. 巻 24号
2. 論文標題 ソマティクスの思想・研究・実践の到達点と臨床教育学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科臨床教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村越直子	4. 巻 6巻
2. 論文標題 ソマティック・エデュケーションがダンス専門教育にもたらした影響と課題 ダンサーとダンス指導者の語りにみる困惑と葛藤を手がかりに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本臨床教育学会 臨床教育学研究	6. 最初と最後の頁 81-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田 奈名子	4. 巻 14(2)
2. 論文標題 「リズムダンス」再考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田 奈名子	4. 巻 19
2. 論文標題 表現運動・ダンス領域における「からだ」を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 舞踊教育学研究	6. 最初と最後の頁 50-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田 奈名子	4. 巻 19
2. 論文標題 A:操体法からダンスへ & B:からだの仕組みに従って動いてみよう「気持ちよく動くだけで踊りになる、からだはどう動きたいか知っている」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 舞踊教育学研究	6. 最初と最後の頁 60-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大橋奈希左
2. 発表標題 表現運動・ダンス領域における「つくる」を問う - 振付という行為の考察を通して -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ哲学会第44回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原田奈名子
2. 発表標題 操体法の実践
3. 学会等名 台湾ソマティック運動教育協会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 原田奈名子・大橋奈希左
2. 発表標題 第一人称のからだ観を育む可能性ー表現運動・ダンス領域に焦点を当ててー
3. 学会等名 日本体育科教育学会第26回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 趙穎妍 大橋奈希左
2. 発表標題 コンテンポラリーダンス作品の創作過程における反省的实践についての研究 振付師とダンサーの相互作用による動きの質の変化に関して
3. 学会等名 第72回舞踊学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原田奈名子
2. 発表標題 深い前屈に至る過程における学習内容の検討
3. 学会等名 体育科教育学会ラウンドテーブル
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大橋奈希左
2. 発表標題 ダンスの授業における「学び」を問う - ソマティクスとボディワークのかかわりから -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ哲学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田奈名子
2. 発表標題 からだは、私自身、私の思考と思念の履歴体
3. 学会等名 日本教育大学協会、全国保健体育・保健研究部門、舞踊研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田奈名子
2. 発表標題 「組み立て体操における学習内容の検討 学んだことがどのように他の運動に生かせるか
3. 学会等名 体育科教育学会ラウンドテーブル
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 原田奈名子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 農山漁村文化協会	5. 総ページ数 105
3. 書名 はたらく女性のためのボディワーク	

1. 著者名 弓削田綾乃、貫 成人、一柳智子、三井悦子、酒向治子、砂連尾治理、葵美京、岩澤孝子、百瀬響、横尾咲子、高橋恭子、亀谷真知子、米山知子、相原進、遠藤保子、神戸周、岡田桂、原田奈名子、平田利矢子、松本奈緒、林夏木、細谷洋子、飯田真己子、鹿内奈穂、野田章子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 映像で学ぶ舞踊学 多様な民族と文化・社会・教育から考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村越 直子 (Murakoshi Naoko) (40465670)	武庫川女子大学・健康・スポーツ科学部・准教授 (34517)	
研究分担者	大橋 奈希左 (Ohashi Nagisa) (90283043)	京都女子大学・発達教育学部・教授 (34305)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------